

る。この点に関心ある方は、拙論「人間のうちの恒久的なるもの—アウグスティヌスの「神の似像」理解—」（『基督教学研究』第22号，2002年12月1-20頁）を参照されたい。

この書のもう一つ重要な指摘が、「他者の知覚」と題された第七章に続く「知解、意志、記憶」と題された最終、第八章でのデカルトとの比較においてなされている。著者によれば、デカルトはそのコギトの発見にもかかわらず、なおアリストテレス的な「実体—属性」の思考の枠組みを前提しており、「デカルトにとって、疑いえないものと経験された思考は、実際のところ、一つの属性であり、他の属性と同様、言葉のアリストテレスの意味で主語である実体を述語づけねばならないものである」（p. 382）。デカルト自身言うように「考えるためには、存在しなければならない」（*Principes*, I, 10, ATIX-2, p. 29）のであれば、この存在は、他の石や動物と同じものであり、それに「考える」という属性が述語づけられるにすぎない。フッサールが「自ら（のコギト）についてのデカルト自身の誤った解釈」（『危機』§18）と批判するものである。これに対してアウグスティヌスが『三一神論』X, 10, 16でなしているのは、もっと徹底していると著者は言う。「実際自己についての認識において、理解する (*intelligere*) という事実そのものが、石にも動物にも同音異義的に用いられる存在と生という言葉に意味を与えているのである」（p. 389）。その意味でコギトが「精神の本性」の考察にとって持つ本来の意義をより厳密に把握していたのは、デカルトであるよりも、アウグスティヌスであったと著者は主張したいのである。アウグスティヌスのコギトの現象学的解釈の豊かな可能性を思われ、思索を励まされた好著である。

Amador Vega,
Ramon Llull y el secreto de la vida,
Ediciones Siruela, Madrid, 2002, 331p.

鶴岡賀雄

本書は、Ramon Llull (Raimundus Lullus, c.1232-1316) の宗教思想の全貌を「生

の秘密（むしろ秘義）（*secreto de la vida*）」という言葉を中心に据えて解釈し、膨大で多彩な性格をもつルルスの仕事に一貫した見通しを与えようとするものである。後半（pp. 189-272）には、著者のルルス解釈にとって重要なテキストの抜粋（西訳）が取められており、ルルスへの入門書としても読むことが出来る。

著者 Amador Vega Esquerria (1958-) 氏は、ルルスと同じカタロニア語を第一母語とする学者で、Freiburg im Breisgau で哲学、神学、宗教史を学んだ。博士論文は、*Die Sinnlichkeit des Geistigen, die Geistigkeit des Sinnlichen und die metaphorische Sprachverwendung bei Ramon Llull* (1992)。現在は、Pompeu Fabra 大学 (Barcelona) の美学・芸術理論講座の教授である。ドイツ神秘思想の代表的研究者の一人 Alois Haas 氏の蔵書を同大学に引き継いで、西洋神秘思想に関する研究センターを組織している。美学・芸術学にも造詣が深く、バルセロナのホアン・ミロ美術館の運営にも関わっている。さらに「東洋」の宗教思想にも関心を持ち、いわゆる京都学派の宗教哲学を学ぶため、南山大学に滞在した経験をもつ。エックハルト、エリアーデに関する編著もある。そうした広い関心から生まれた著作に、*Zen, mística y abstracción. Ensayos sobre el nihilismo religioso*, Editorial Trotta, Madrid, 2002 (カタロニア語版 *Passió, meditació i contemplació. Sis assaigs sobre el nihilisme religiós*, Editorial Empúries, 1999) がある。同書では、西谷啓治の宗教哲学や芭蕉の俳句とともに、パウル・ツェランの詩、マーク・ロスコの絵画が論じられている。ロスコを論じた章では、彼の絵画における「抽象 abstraction」が、神秘思想の伝統で用いられてきたこの語の意味、すなわちこの世の具体性・具象性からの「離脱」としての意味を本質的に引き継ぐものだとする解釈を提出している。ルルスを扱った第三章 (La imaginación religiosa en Ramon Llull: una teoría de la oración contemplativa) は、本書の論旨を凝縮したものと言える。

このようなタイプの学者であるから、本書も、多言語、多宗教の交錯する中で生み出されたルルスの著作群を中世哲学研究の学史の厚みの中で堅実かつ詳細に跡づけ位置づける、といった類のものではない。(また評者も、そうした水準でのルルス研究に通じている者ではないので、文献学や中世論理学史のコンテキストの中でのルルスの位置づけに即して本書を紹介することはできない。) ルルスの思想の概説書ではあるが、堅実でバランスのとれた紹介というよりは、著者独自の視点からする、特徴あるルルス解釈の書である。その際の大きな枠組となるのは、そう明言されるではない

が、「神秘主義」という把握法といってもよいだろう。ただし著者は「神秘主義」を、「神秘体験において直覚的に悟られる古今東西の宗教の秘められた核心」といった意味で何らか実体的に想定しているわけではない。ジェイムズ、マシニョン、エリアード、ユング、また西田、田邊、西谷、上田閑照といった名前が言及されるけれども——これら日本の宗教哲学者たちの理解は欧米におけるステレオタイプをさして出るものではない——、著者の神秘主義理解は、狭義の哲学や神学がこととする理論的知性の営為に限定されずむしろそれを逸脱することにおいてその意義を有する著述および行為としてこれを捉えるものである。神秘家の仕事の核心を、叙述や行動のスタイル (*modus loquendi, modus agendi*) の特異性に見ようとするそうした態度は、著者も引く J. Baruzi (“Introduction à des recherches sur le langage mystique”, 1932; rep., in: *Encyclopédie des Mystiques*, vol. 1, 1996) や、とくに M. de Certeau (*La fable mystique*, 1981) の神秘主義把握に近い (p.97)。安定したどのような言語ジャンルへの囲い込みも拒むかに見えるルルスのような対象には、こうした把握はたしかに有効だろう。

全体は三部に分かたれ、「生の秘義」と題される第一部は、ルルスが最晩年に著した一種の自伝 *Vita coetanea* に拠って彼の生涯を辿る。しかし単なる伝記ではなく、彼の生涯と著述のあり方を四つの時期に分けて、その変遷自体にルルスの思想の根本のかたちを見ようとする。波乱に富んだ彼の生涯自体を一つの作品として解釈しようとする試みと言える。その四期とは、宮廷での世俗生活からキリストの幻視によって回心 (*conversión*: 本書のキーワードであり、生の根源的な方向転換の意) するまで (1274-63)、イスラム教徒とユダヤ教徒をキリスト教に「回心」させるための理論を確立すべく巡礼と独学を重ねる自己形成 (*formación*) の時期 (1263-74)、そして著した最初の著作 *Compendium logicae Algazelis* や *Llibre de contemplació de Déu* (1274) の試みが或る限界に達して、故郷マヨルカ島のランダ山に籠もり、いわゆるルルスの術 (*ars*) の洞察を得、これを理論的に深め展開する観想生活 (*contemplación*) の時期 (1274-83)、そして *Fèlix o Llibre de maravelles* 等の文芸的作品や「術」を説明するさまざまな書物を著して、理論と教説の流布に尽力する広布 (*predicación*) の時期 (1283-1316)、である。本書では、ルルスの思想の解釈全体がこの四段階のシェーマ (p.91) によってなされていくのだが、その歩みを一貫

するものは、聖人性 (santidad) という理想へのたえざる「回心」として捉えられたキリスト教の玄義 (misterio), ないし秘義 (secreto) であるとされる。この四期を著者は、*Compendium logicae Algazelis* 以来のルルス自身の基本的思考枠組である「感覚的なもの (sensuale) - 感覚的なもの」, 「感覚的なもの - 知性的なもの (intellectuale) ないし霊的なもの (spirituale)」, 「知性的なもの - 知性的なもの」, 「知性的なもの - 感覚的なもの」の四段階にも対応させている。この四つの定式は多義的だが、前項によって後項を「求める」こととすればわかりやすいだろう。最後の第四段階は一種の下降だが、キリスト教的「ケノーシス」の姿でもある。

第二部は「英知と共苦」と題される。ほぼ同じ時期に著された *Llibre de contemplació de Déu* と *Ars inveniendi veritatem compendiosa* をもとに、ルルスの宇宙論、人間論、そして有名な論理学が論じられる。宇宙論と人間論は対応しており、それぞれを構成する感覚的なものと知性的なものがなす上記の四つの対応関係が、すなわち生のあり方の四段階をなすわけである。人がこの四段階を「回心」を経て進み行くに依じて、宇宙（世界）もまた四つの相のもとに現れてくる。

神のさまざまなすばらしさ (dignitas) を一種記号化し、その組合せの可能性を論理的に網羅していくことで神の深奥に迫り、また神と世界および人間との真の関係を発見しようとする「術」は、以後 *Ars demonstrativa* (1283-89), *Ars generalis ultima* (1305-08), *Ars brevis* (1308) 等、さまざまなヴァージョンを経て展開していくが、著者はこれを、その実践によって人が世界をそれまでとは別様に見ることができるようになるために開発された「別の言語」の創造として解釈している。世界を別様に語る術の実践によって世界の見方もまた変わる。それは魂に内的回心が生ずることとも対応している。つまり回心とは、視線を「別の場所」へと向け変えることであり、それは、それまで自らのものとしていた場所を失うことでもある (p.85)。

「言葉の錬金術」と題される第三部は最も興味深い。「術」と並んで、ルルスの著作の重要なジャンルをなすのは、名高い *Llibre d'amic i amat* を代表とする対話や問答形式による著作群だが、そこでの対話や問答は、一定の理論的主張を提出したり、問題を問い進めて一つの結論に到るといった構成を採ってはいない。問いと答えとは、その一つ一つが黙想ないし観想の対象なのであり、また祈りであるかのようである。会話する二人が問い答えあうこと自体が、二人でなす祈りなのでもある (*Zen, mística y abstracció*n, p. 81)。そこでは、問いへの答えは別の問いへと回付され、さらにずら

されて、ときにはもとの問いへと回帰してしまう。議論が深まっていくのではなく、問答の論理性はしばしばはぐらかされ、そうした経巡りのなかで言葉はその語義さえ曖昧になり輪郭を失っていくかのようである。これを著者は、言語の破壊 (destrucción de lenguaje) と呼んでいる。しかし、こうした言葉の巡歴自体が、愛の語り合い (conversación) として遂行される回心 (conversión) なのであり、これがルルスの説く神秘的合一のかたちだと著者は解している。

瞥見したように、二度の大きな沈黙期（「形成」と「観想」の時期）を含んでルルスの著作群は質的に変遷し展開を重ねていく。しかもその過程を通じてつねに論理的構築と詩的創作、普遍理論と個人的情念の吐露とが共存しており、それらは全体として一種の謎を醸し出すかのようである。これを著者は、いくつかの画期を経て、生の秘義ないし秘密をつねに新しく語り出し、世に有効に作動させようとする不断の試み、いわば言葉の冒険として読み解こうとする。したがってルルスの言葉は、また思想は、上述の対話のように、一定の整合的体系や最終的結論に到るのではない。謎を解くよりも、むしろ謎を謎のまま残す著作群である。それは、ルルス本人がその秘義＝謎に捉えられ、それを抱え込んでいるがゆえに、そうした自身の状況がその都度著作群として提示されたものでもある。かくてそれは、一定の思想を読者に伝えるためというよりも、読む者（また「術」を实践する者）をもまた生の秘義＝謎への問いに巻きこむための言語行為である (p.126, 134)。これが巧まざるルルスの技法であった。著者ベガ氏のルルス読解の根幹は、概ねこのようなものであると思われる。

秋山 学 著『教父と古典解釈——予型論の射程——』

創文社、2001年、271頁

谷 隆 一 郎

本書は表題からも窺われるように、欧米および我が国において多分に分断されている二つの学問領域、つまり教父学とギリシア・ローマの古典学とを橋渡ししようとし